

第三章 「イラク攻撃は避けられたか」を読んで ～超大国アメリカの伝統～

LH18-4049B 西堀 翔太郎

LH18-4056B 大熊 舜

LH18-4062H 下村 まどか

1 正当な戦争

2 二十一世紀の行方

1 正当な戦争

合衆国の短い歴史の中で1つ伝統があるとすれば、それは（明白な天命）だ。神から特別な任務を託されたという信念である。＜文明の恩恵＞を広めるという概念は、現在も数多くの地域にイデオロギー的な影響を与えている。米国が生み出す摩擦の一因は＜神の絶対性＞に基づいたこのような使命感ではないだろうか。

外交は戦争の下準備に過ぎないのか。それとも武力行使は、政治的解決が行き詰った末の最終手段なのか。

- 一 武力行使は最終手段である
- 二 攻撃対象として正規軍と民間人を区別する
- 三 適切な権限を与えられた者が正義の名の下で開戦する
- 四 勝利の公算が高い
- 五 目的とする平和に現状況よりも進歩が見受けられる

＜正当な戦争＞の定義について米仏で話し合われるなかこのような条件を一つもクリアしてないのではないかという疑問が専門家によって投げかけられていた。

2 二十一世紀の行方

アメリカは大国であるが故に市民の営みが国境の枠内で事足りるような錯覚に陥りやすく生活範囲の外へ関心を向けずに、「自分の国がパワフルなのには理由がある」政府の正当性を過信しがちなのであれば、国際協調という発想が生まれにくいことも説明がつく。

米政府は世界でもずばぬけた情報収集能力を保持しているが行使される手段についての透明性を問うことなく、ワシントンに集中している力に国民が無条件で判断を委ねることは、とても危険なことである。このような危険な状況に日本を含めた諸外国はアメリカがすべてではないという議論をもっと活性化させるべきである。